

戯曲『仮面舞踏会』(上)

——作者の構想の表層と深層——

木 村 崇

I 戯曲執筆の動機

§ 1 作家が特定の作品に取り組もうとするとき、かならず、かれにその創造的気魄をもたらした具体的な何かがあるはずである。それを詮索する作業は、文学研究者にも特別の想像力を要求するという意味で、この上もない魅惑を感じさせる。ところで、文学というものが、作家、すなわち特定の歴史的・社会的諸条件のもとに普遍的・客観的に存在している一定の文化的色彩に染りながらも、同時に創造的活動のなかで限りなく個性的なものの実現を志向する特殊な人間と、その作家の手にかかって作り出された作品と、作家と同様にして歴史的・社会的存在である受容者と、その受容過程で再現されるもうひとつの事実と、さらにそういう無数の事実の総和によってたえず作り上げられつつある文学的環境という、諸項の相互作用によってはじめて成立しうる動的な現象である以上、文学研究はほんらい、それら全体の包括的把握に向わなければならない使命をおびている。したがってこの作業が魅惑に満ちたものであればあるほど、それは文学の一部分に過ぎないはずの“創作の動機”を、その作品の全体的な価値に優先させかねない危険性を孕んでいる。さらにこの作業は、いわばほとんど目には見えないものを、わずかな手がかりを頼りに、たくましく想像力を働かせることによって進められるわけだから、どうしても仮説の恣意性の度合が濃くなるという欠陥を持っている。だから相当の根拠があっても、このような分野での仕事は慎重を期すべきであろう。

§ 2 戯曲『仮面舞踏会』(《Маскарад》) は、レールモントフが積

極めつつ執拗にその発表の機会を求めたという点で、それまでの作品とは、作者の態度そのものが大きく異っている。たしかにこの戯曲の執筆以前にも、1835年の『読物叢書』8月版(августовская книжка《Библиотеки для чтения》)に掲載された長詩『ハジ・アブレク』(поэма《Хаджи-Абрек》)のような例がないわけではない。しかしこれは、レールモントフの従兄弟であり学友であったニコライ・ドミートリエヴィチ・ユーリエフ(Николай Дмитриевич Юрьев)が無断でセンコフスキ(Сенковский)のところへ持ち込んだものであり、発表されて始めて真相を知った詩人自身がたいそう立腹したほどだから、自主的に上梓を望んだのでは決してなかった。¹⁾ また同人雑誌的なものであれば、1830年の9月に出版された雑誌『アテネイ』(журнал《Атений》)に詩『春』(《Весна》)がのったのを最初に、²⁾ 士官学校で出していた雑誌『学校のそらやけ』(《Школьная заря》)などにも書いている。³⁾ だが、首都の舞台にのせることを目指して書いた、しかも緊急の事態にせき立てられるかのように書き急いだ『仮面舞踏会』に対して、広範な読者や観客への積極的な訴えかけを追求しようとする意欲からいって、それらを比較の対象とすることは無理である。

-
- 1) См. В. Мануйлов, Летопись жизни и творчества М. Ю. Лермонтова, изд-во «НАУКА», М.-Л., 1964, стр. 62-63. この年譜によれば、『ハジ=アブレク』発表のいきさつについては、近衛騎兵学校時代の友人 А. М. Меринский, ジャーナリストで回想記作家の В. П. Бурнашев, 遠縁で幼な友だちの А. П. Шан-Гирей らがくわしく紹介している。とりわけ三人目の証人は、〈Лермонтов был взбешен, по счастью, поэму никто не разобрал, напротив, она имела некоторый успех, и он стал продолжать писать, но все еще не печатать.〉と断言的な調子で、その後も詩人が自作の出版の意志は持たなかったことを証言している。
- 2) См. там же, стр. 35. モスクワ大学教授 Михаил Павлов が発行したこの雑誌は、多彩な執筆陣からいって、「同人誌」は過小評価か。
- 3) См. там же, стр. 55. これは近衛騎兵学校当時および近衛驃騎連隊時代の同僚であった А. Ф. Тиран の証言によるものだが、中心的な執筆者がレールモントフとマルティエーノフ(Мартынов)であったといわれるこの文集は、掲載作品名まで回想して書かれてはいるものの、現存するものなのかどうか論文筆者にはわからない。

このことは『仮面舞踏会』の執筆の動機を追求する作業に一定の根拠を与える。すくなくとも、1830年や1831年にまだ少年とっていいほど若かったレールモントフの書いた三本の戯曲『スペイン人』(《Испанцы》), 『人々と情熱』(《Menschen und Leidenschaften》), 『変り者』(《Странный человек》)との違いも、ひとつには、この上演を熱望する気持の有無にあるといえよう。たとえば『スペイン人』には献辞(посвящение)がついていて、その第2節(2-я строфа)には<Нет! не для света я писал—/Он чужд восторгам вдохновенья;/ Нет! не ему я обещал/свои любимые творенья. いや/わたしが書くのは上流社会のためではない——/靈感の歓喜とは無縁の者たちだもの。/そうだ/そんなものに約束などするものか/愛すべきわが創作は>¹⁾と書かれている。『人々と情熱』にも献辞がある。どのような名の人物に宛てたものか今日まで定かになってはいないが、原稿に描かれている枯木のそばに行む乙女にこの戯曲を捧げたのであろうということは察しがつく。²⁾ さて『変り者』にいたっては序言があって、この作品はレールモントフを長い間煩わし続けた真実の出来事をドラマ化したものであり、<Лица, изображенные мною, все взяты с природы, и я желал бы, чтоб они были узнаны, — тогда раскаяние, верно, посетит души тех людей……ぼくが描いた人物たちは皆実在の人間をもとにしたもので、願わくばそれが誰であるのかを知っていただきたいと思っている。そうすればきっと、その人たちの心は後悔の情に見舞われるだろう

- 1) М. Ю. Лермонтов, Собрание сочинений в 4 томах, изд-во «Художественная литература», М., 1964-1965. (с примечаниями И. Л. Андроникова), т. III, стр. 123. 以下この論文におけるレールモントフの作品およびそれに関する解説からの引用は、特別に断りのないかぎりこの4巻本からによるものとし、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で表記する。
- 2) См. III, 556-557. 解説者アンドロニコフ(И. Л. Андроников)が紹介しているところでは、この乙女が誰であるかについてふたつの説があり、ひとつはアンナ・ストルィピナ(Анна Столыпина, やはり詩人の遠縁にあたる)を、もうひとつはエカテリーナ・スシコーヴァ(Екатерина Сушкова, この女性については、この論文の§5を参照のこと)を推定しているという。

から>¹⁾ と、挑戦的な調子で書いていることでもわかるように、そもそもある実在の人間たちの目に触れさせることを狙って書いたふしがある。もちろんこの作品が限定された読者層にしか値いしないものだとは決していえない。作者自身も序言の最後で<И этому обществу я отдаю себя на суд.そしてぼくは自分をこういう世間の判断に委ねるのである>²⁾ と宣言しており、一方ではより広範な読者を予定していたことも——発表の意志があったかどうかは別にしても——はっきりしている。ただし、戯曲としては異例なことに、バイロン (Lord Byron) の『夢』(《The Dream》) から抜粋した詩行がエピグラフに使われている以上、もっぱら読む戯曲として書かれたものであって、上演は始めから目的にしていなかったとってよいであろう。

こうして『仮面舞踏会』は、先行する三本の戯曲との間には、4～5年の時間的な隔たりがあるだけでなく、その創作の動機にも大きな違いがあり、そこにはそれ自体研究されてよい固有の何かがあったと判断すべきである。

§ 3 わたしたちはかつて、『ワジム』の主人公の悪魔的性格の形象は「詩劇『仮面舞踏会』《Маскарад》(1835)やそのヴァリエーションである『アルベールニオン』(1836)を経て——『変り者』《Странный человек》(1831)など、少年期に作ったドラマに溯ることさえ可能かもしれない——『現代の英雄』《Герой нашего времени》(1840)へと発展的に継承されていた³⁾ と指摘したが、その具体的検証は今後の課題にしてあった。

『ワジム』が未完に終わったことと、その後に書かれた主要な作品の中で、悪魔的性格の様々な形象化が試みられたこととは無関係ではあり得ない。レールモントフの創作年譜には、『ワジム』の完成を断念してから『仮面舞踏会』の執筆にとりかかるまでの期間に目立った創作活動は記さ

1) III. 299.

2) Там же.

3) 木村 崇, 『ワジムの悪魔的性格』, 中京大学〔教養論叢〕第17巻第3号, 1976, p. 121.

れていない。それだけにこのふたつの作品は、一方は散文の長編小説で他方は韻文のドラマという、ジャンルの、言語的な差異の大きさにもかかわらず、打消しがたい内的な関係で結びつけられているものと見るべきである。ただし、その検討に移るばあい、歴史小説『ワジム』が未完になった真の理由を明確にしておかなければ、その後の発展を論ずることは不可能である。

この問題に関するエイヘンバウム (Б. М. Эйхенбаум) の見解にわたしたちは納得できない。かれは次のようにいっている。<Причины не известны, но надо думать, что остановка произошла в связи с выходом «Истории пугачевского бунта» Пушкина(1834): появление этой книги могло заставить Лермонтова прервать свою работу, тем более что стало известно о предстоящем издании романа Пушкина из той же эпохи («Капитанская дочка»). Надо прибавить, что в том же 1834г. вышел сборник повестей Пушкина — событие огромной важности в истории русской прозы. После этих повестей, написанных «со всею свободою разговора или письма» (10, 192) нельзя было писать прозу тем стилем патетической поэмы, каким был начат «Вадим». Лермонтов возвращается от прозы к стиху, от романа — к драме. 原因は不明だが、プーシキンの『プガチョフ叛乱史』(1834)の出版に関連して中絶が生じたものと考えねばならない。なぜならこの本の出現はレールモントフをして自分の作業を中断させるものであったし、ましてや同じ時代を取りあげたプーシキンの長編小説(『大尉の娘』)が発行予定になっているのがわかったのであるから。付言しなければならぬのは、同じく1834年に、ロシアの散文学史における重大事件であるプーシキンの小説集が出たということだ。こういう「口語や文語を駆使して」(10, 192)書かれた小説が出たあとでは、書き始めていた『ワジム』に用いられている感動的な叙事詩調の文体ではもはや、散文を書くことができなかつた。レールモントフは散文から韻文へ、長編小説からドラマへ戻るのである>¹⁾ まずこの引用文の前段

1) Б. М. Эйхенбаум, Статьи о Лермонтове, изд-во АН СССР, М.-Л., 1961, стр. 197

で示されている見解は、かつて『ワジム』研究の中でわたしたちが批判した、いわゆる「外的要因決定」説であり、¹⁾ しかもエイヘンバウム自身が、すぐあとでわたしたちの引用する個所において示している、もうひとつの立場と、はっきり矛盾している。これについては後ほど言及しよう。さて後段は、『ワジム』の中で用いられている文体を一色のものとして理解しているという意味で正しくない。むしろ『ワジム』の内部では二つの文体が対立しあい、筋の発展につれてその矛盾が破綻にまで達したのだと理解すべきである。わたしたちは以前この点を分析して、『ワジム』の場合、「対立する文体の共存——それは対立する方法の共存の現象形態である——は、この小説が完結しえないことを予告している。形式的な破綻が明らかになり、しかも農民大衆や地主たちの鋭い対立を描けば描くほど、そのリアリティに主人公の、形象としての空虚さが浮彫りにされ、耐えがたいものになっていったのである」²⁾ という結論を出した。こういう事態に陥ったからこそ「レールモントフは、悪魔的性格を展開するには、別の、それにふさわしい状況が与えられるべきだということに気付いた」³⁾ のである。

だからこそ『ワジム』から『仮面舞踏会』への移行に関するエイヘンバウムの説明は不十分である。〈…… чем же был подсказан и подготовлен «Маскарад»? Конечно, азартная игра в карты была в тогдашнем светском Петербурге настолько заметным и характерным явлением, что литература не могла пройти мимо него. Она и не прошла: достаточно указать на «Пиковую даму» Пушкина. <…………> Однако мало ли было в тогдашнем Петербурге других характерных явлений, которые могли бы с большим правом привлечь к себе внимание двадцатилетнего Лермонтова, только что вступившего в этот «завистливый и душный»

1) 前掲拙論, стр. 152~153 参照。

2) 同上, p. 153。

3) 同上, p. 154。

свет? Если же он заинтересовался миром игроков, то появление «Пиковой дамы» (1834), казалось бы, должно было удержать его от намерения писать о них драму. На самом деле получилось иначе: «Пиковая дама» была, по-видимому, одним из толчков к замыслу «Маскарада». 何をきっかけに『仮面舞踏会』を思いつき、何が作品のもとになったのであろうか? もちろんトランプ賭博はその当時のペテルブルグ社交界ではよく目につく特有の現象だったので、文学がそれを見のがすはずはなかった。げんに見のがさなかった証拠に、プーシキンの『スペードの女王』をあげるだけでも十分であろう<……>しかし当時のペテルブルグには、この『妬みに満ち息のつまりそうな』社交界に入ったばかりの20歳のレールモントフの注意を、当然至極にもひきえたであろうその他の特徴的な現象も数多かったはずだ。賭博者たちの世界に興味を持ったとしたら、『スペードの女王』(1834)の出現で、たぶん、賭博者のことをドラマに書こうなどという気持はそがれたにちがいない。ところが結果は違っていた。『スペードの女王』はおそらく『仮面舞踏会』を着想させた動機のうちの一つになったのである>¹⁾ こういう理解は、かれの『ワジム』中断の理由づけとは矛盾する。若くて意気盛んな作家であれば、たまたま大家の作品とテーマや題材が共通していたり、文体的に自分のものが見劣ったりしても、執筆の継続を断念するようなことはまずありえない。貧欲にそれを消化して乗り越えてゆくか、無視して独自の道を追求するというのが、考えうるもっとも普通の反応である。そういう常識に立てば、『スペードの女王』が新たな戯曲の執筆にレールモントフを向寄せたひとつの刺激になったと考えるのは自然である。

もしエイヘンバウムが引用部分の前段にもこの立場を貫いていたなら妙な矛盾は避けられたはずである。『ワジム』では、農民たちの蜂起の激烈な描写の部分で筆を止めてしまったことを、『プガチョフ叛乱史』が出たことや、『大尉の娘』の執筆が予想される(まだ書かれてはいないのだ!)ことに原因付けるということはなかったはずである。『ワジム』が未完に

1) В. М. Эйхенбаум, Статьи о Лермонтове, изд-во АН СССР, М.-Л., 1961, стр. 197.

終わったという事実だけに目をうばわれることなく、熟読し、どこまで書き継がれた地点で中断したのかを考えてみると、おのずからその内的原因は浮び上がってくるのである。ところで、『スペードの女王』が『仮面舞踏会』に影響を与えたいらしいという点についての指摘そのものは考慮に値する。そしてその考慮はとりもなおさず、創作の動機を追求する作業に他ならない。

§ 4 ところが、このような作業は、いったん着手すると、かぎりなく拡がっていくという宿命にある。戯曲『仮面舞踏会』に直接、関接の影響を与えたり、源泉になったと思われる、作品や作家は枚挙にいとまがないほどである。

自分の妻の腕輪が他の男の手中にあることを知って、かの女が不義をはたらいたものと誤解し、嫉妬に狂って毒殺してしまうという筋書を見て、シェイクスピアの『オセロ』からの影響を立証しようとする研究は数多くなされてきた。たしかにレールモントフがシェイクスピアに関心を持ったことは事実であるが、アルバーニンの原型がオセロであるかどうかは疑わしい。フォードロフ (A. В. Федоров) は“オセロ原型説”に立つ研究を批判的に総括しながら、次のような結論を下している。〈……общей с Шекспиром у Лермонтова оказывается только схема сюжета (трагедия ревности, возникшей из-за досадной случайности; роль мстительного злодея) и схема героя (страстный, ревнивый муж, ослепленный подозрением и убивающий жену). Все идейное и эмоциональное наполнение этой «схемы», создающее подлинное своеобразие произведения и единственно важное, конечно, для поэта (интересы которого так часто не совпадают с направлением поисков литературоведа-компаративиста), глубоко отлично.……レールモントフにおいてシェイクスピアと共通するところは、せいぜい主題展開の図式 (いまいまいしい偶然の出来事のために生じた嫉妬心の悲劇, 執念深い悪人の役割) と主人公の図式 (疑念に目がくらんで妻を殺害する熱情家で嫉妬深い夫) でしかない。この「図式」にこめられているすべての思想的・情緒的内容は、作品の真

の独自性をつくり出し、いちばん重要なものを——もちろん詩人にとってのである(詩人の利害はおうおうにして比較文学研究者の探究の方向とは合致しない)——つくりだすものだが、その点ではまったく違っているのである>¹⁾

どんなに独創性の強い作家であろうと、すでにある水準に到達している文化的・芸術的土壌に根ざしつつ、その作家的才能を育むのであるから、彼以前に人類が達成したもっともすばらしいものは、意図的に模倣したり借用したりパロディー化したりする場合だけでなく、かならず新しい作品の中には何らかの痕跡をとどめるものなのである。だから、シェイクスピアの作品と形式的に、あるいは部分的に類似するところがあるというだけで、一次的影響をうんぬんするのは早すぎる。

レールモントフの『仮面舞踏会』は、それを検閲したオリデコープ(E. Ольдекоп)が<Драматические ужасы наконец прекратились во Франции; так неужели их хотят возродить у нас? 陰惨劇はついにフランスでも廃れてしまったのに、そのようなものをわが国において復活させたいとでもいうのだろうか?>²⁾と書いているように、フランスのロマン主義演劇の手法を意図的に採用しているふしがある。しかも、あとでこの論文後半において考察するが、一種のカムフラージュ手段として採用したものと見られる。

ロマン主義演劇は、エフィーモヴァ(З. Ефимова)の研究によれば、『オセロ』の大団円に頼ることが再三あったということだから、『仮面舞踏会』と『オセロ』における共通性は、フランスのロマン主義的ドラマを媒介項にはさんだ、間接的なものであった公算が強い。

研究者の中には、当然ながら、この媒介項に属するあれこれの代表者との関係を指摘するものがある。たとえばコマロヴィチ(В. Комарович)は、ヴィクトル・ユゴーの『エルナニ』には、アルバーニンの役柄を予告する

1) А. В. Федоров, Лермонтов и литература его времени, изд-во «Художественная Литература», Л., 1967, стр. 188.

2) М. Ю. Лермонтов, Сочинения в 6 томах, т. V, М.-Л., 1956, стр. 743. 原文はフランス語。

要素ばかりか、テーマや構成の諸特徴においても共通するところが多くあることを主張し、〈Прототипом, несомненно, послужил тот же «Эрнани», где в эпилоге прямо изображен маскарад, с «черным домино» в качестве последнего мстителя, точь в точь как присоединенной Лермонтовым для четвертой редакции сцене Арбемина с Неизвестным (которому в первом действии соответствует «мужская маска»). たしかに手本になったのは、エピローグに仮面舞踏会が直接描かれていて、第4稿のためにレールモントフが追加したアルベニン対未知の男（この人物は第一幕の「男の仮面」に当たる）の場面と寸分もたがうことなく、最終的復讐者としての「黒い仮面舞踏会衣裳」の男が出てくる、かの『エルナニ』である¹⁾ といっている。またかれは、一致はそればかりでなく、両者とも復讐のテーマには政治的抗議の意味が含まれていて、社会的不正義に対して復讐する謀叛のテーマとなっている点でも共通のものを持っているのだという。²⁾

『仮面舞踏会』に含まれている様々な要素を抽出して、その源流をさかのぼってみようとする試みは、シラーやバイロンにまでもおよび、またロシアの作家の中では、キューヘリベークエル（В. К. Кюхельбекер）の『イジョルスキ』（«Ижорский»）やグリボエードフ（А. С. Грибоедов）の戯曲『知恵の悲しみ』（«Горе от ума»）との関係までもが論じられている。なかでも『知恵の悲しみ』は、『仮面舞踏会』との基本的な継承関係について触れられているという意味では、注目に値する。著書『レールモントフとかれの時代の文学』（«Лермонтов и литература его времени»）の中で、前出のフォードロフは、第3章を文字通り「レールモントフとグリボエードフ」と題して、全般的にこの問題に光をあてようとしている。かれは両者の関係のきわだった特徴を次のようにまとめている。〈«Горе от ума» с этой драмой («Маскарадом» — Т. К.)

1) В. Комарович, Автобиографическая основа «МАСКАРАДА» в кн.: «Литературное наследство», т. 43-44, М., 1941, стр. 668.

2) Ср. там же.

не связывают ни одно текстовое совпадение, ни фабула, ни характеры главных действующих лиц, ни сюжетная схема их взаимоотношений и взаиморасположение в ходе действия. Родство обоих произведений гораздо более глубокое и принципиальное, чем та общность, которая легко сводится к ряду более или менее близко совпадающих внешних признаков. 『知恵の悲しみ』をこのドラマ(『仮面舞踏会』——木村)と結びつけるものは、ただ一カ所のテキスト上的一致でもなく、筋でも、主要な登場人物の性格でもなく、また彼らの相互関係の主題展開上の図式や、劇の進行における相関的な配置のしかたでもない。両作品の同類性は、多少なりとも緊密な外面的一致をみせる一連の諸特徴というものにたやすく帰するような共通性よりは、はるかに深くて原理的なものなのである¹⁾

戯曲執筆の動機を探ろうとしているわたしたちは § 3 で、レールモントフの一連の作品群における悪魔的性格を発展的变化の中でとらえ、『ワジム』がひとつの直接的な契機になっているであろうと予測した。もしその他にも継承的關係に置かれるべき作品があるとすれば、それは当然確認しておかねばならない。「外面的一致をみせる諸特徴というものにたやすく帰するような共通性」ならば、パロディでも書くのでない限り、新たな、しかもたいへんな意気ごみでその発表の道を追求するような作品を、生み出す契機とはならないであろう。だが<эти два произведения русской драматургии больше всего роднит то, что исследователь (Орлов——Т. К.) определяет как «высокое лирическое напряжение всего <……> тона», связанное с ролью, которая и тут и там принадлежит голосу поэта. Россия・Драматургииのこれら 2 作品の同系性をなにもまして示しているのは、ここかしこで詩人の声に属する役と結びついた《全体のトーンの<…>高尚な抒情的緊張》として研究者(オルロフ——木村)が規定しているものである>²⁾ ということになれば、作品にたち向う作家自身の態度に

1) А. В. Федоров, Лермонтов и литература его времени, Л., 1967, стр. 179.

2) Там же, стр. 180.

共通性が存在するということになる。

ところがフォードロフが例証として示す事實は、かならずしもわたしたちをうなずかせるものではない。たとえばかれは、悲劇性と諷刺のきいた喜劇性の結合というジャンルの特質の共通性を指摘する。¹⁾ また、両者ともその韻律が、不定韻脚の弱強格 (разностопный ямб) で、各節ごとに関連のない韻が踏まれているという共通点にも言及しており、このことはグリボエードフの諷刺的・暴露的伝統を踏襲しようとするレールモントフの態度のあらわれだという。²⁾ さらに、明確な警句、アフォリズム、対照法、セリフ同士の衝突といった対話のスタイルの共通性をあげ、³⁾ 主人公とコミカルな登場人物との隔りの大きさもまたそのような共通性のうちに数えあげている。⁴⁾ これらは見たところ、比較文学的影響関係のもろもろの「発見」や「立証」とあまり違わないように思われる。

もちろんわたしたちは、「全体のトーン」に、二人の作家に共通する情感性を感じないわけではない。しかしそれはむしろ、継承関係における影響を「与えた」側と「受けた」側の間に生じた現象というよりは、それぞれの時代を——両者の時代の時間的な差はそれほど大きくはないが、「デカブリストの乱」の前と後という本質的な違いがあることを忘れてはならない——怒りと憂いを持って「生き急いだ」二人の生きざまの共通性ではなかったのか？

§ 5 レールモントフが騎兵士官学校での「恐怖の2年間」をようやく終え、騎兵少尉に昇進したのは1834年11月22日であった。その年の12月4日、真新らしい驃騎兵の軍服で正装したかれは「K夫人」の舞踏会に出て、エカテリーナ・スシコーヴァ (Е. А. Сушкова) と再会する。このふたつ年上の女性が4年あまり前に16才のレールモントフに与えた屈辱感をまざまざと思い出したとき (この再会から何日目にそうなったのかは不明だ

1) А. Б. Федоров, Лермонтов и литература его времени, Л. 1967. стр. 180.

2) См. там же, стр. 180-181.

3) См. там же, стр. 181.

4) См. там же, стр. 184.

が), かれはひそかな復讐の企てを決意した。当時すでに首都の社交界にデビューしていたスシコーヴァは, コケテッシュな感じの美人であったから, まだモスクワ大学付属貴族寄宿学校の最上級生であった「みにくい少年」がたちまち心を奪われたとしても不思議ではない。かの女はそのうぶな恋心に侮蔑で応えたのであった。

再会からの1月間, レールモントフは人目もはばからずスシコーヴァに求愛しつづけた。今度はかの女の方も気持をなびかせはじめる。そのために, だれもがスシコーヴァの未来の夫になる人と見なしていた, アレクセイ・ロプーヒン(Алексей Лопухин)との話はこわれてしまう。ところでこのアレクセイ・ロプーヒンという人物は, 少年時代からのレールモントフの友人で, またその姉マリア・ロプーヒナ(Мария Лопухина)は, 両親も兄弟もないレールモントフにとって, ずっと年上の, どんな内密な相談でもできる姉のような人であった。二人の間に交された手紙は, レールモントフの内面生活をよく知らせてくれる貴重な資料である。さてもうひとり, ロプーヒン家の末娘ヴァルヴァーラ・ロプーヒナ(Варвара Лопухина)は, 詩人がモスクワ大学の学生の時から愛しあっていた恋人なのである。したがってスシコーヴァへの求愛は, かの女への復讐の手段であったというだけでなく, それ以上に入り組んだ背後関係を持つものであったことがわかる。

1834年12月23日の日付のあるマリア・ロプーヒナ宛の手紙には, この頃の自分の行動に関する報告がなされている。<Я теперь бываю в свете…… для того, чтобы меня узнали, для того, чтобы доказать, что я способен находить удовольствие в хорошем обществе…… Ах! я ухаживаю и, вслед за объяснением в любви, говорю дерзости. Это еще забавляет меня немного и хотя это отнюдь не ново, однако же случается не часто!…… Вы думаете, что за то меня гонят прочь? О нет! напротив: женщины уж так сотворены. У меня появляется смелость в отношениях с ними. Ничто меня не смущает — ни гнев, ни нежность; Я всегда

настойчив и горяч, но сердце мое холодно и может забиться только в исключительных случаях, <……………>

Скажите, мне показалось, будто он (Алексей Лопухин — Т.К.) равнодушен к m-Me Catherine Сушковой, известно ли это вам? ……Дядьям сей девицы, кажется, очень хотелось бы их повенчать. Сохрани боже! …… Эта женщина — летучая мышь, крылья которой зацепляюся за все встречное. Было время, когда она мне правилась; теперь она почти принуждает меня ухаживать за нею …… но, не знаю, есть что-то такое в ее манерах, в ее голосе, грубое, отрывистое, надломленное, что отталкивает; стараясь ей нравиться, находишь удовольствие компрометировать ее, видеть, что она запутывается в собственных сетях. いまやぼくは社交界に入りしています ……顔を売ろう, ぼくにも立派な社会をよろこびとすることができるのだということを証明しよう, というわけです。何と! ぼくは御機嫌とりをして, 愛の告白のすぐあとで, 不作法な口をきいてやるのです。こういうことはぜんぜん新味はないのですが, まだいくらか気晴しになります。でもそうしょっちゅうあるわけではありません …… そんなことをしていたら追払われてしまうのでは, と思われるでしょう。いいえ, 逆です。女性というものはそういう具合に出来ています。ぼくも彼女らと付き合っていていける勇気ができました。どうされようとこまるようなことはありません。怒りを買おうと, やさしくしてもらおうと。ぼくはいつだって根気はいいし燃えています, 心臓はひえきっていて, よほどのことがないかぎり鼓動し始めません。<……………> どうもかれ (アレクセイ・ロプーヒン — 木村) はマドモアゼル・カトリーヌ・スシコーヴァに御執心のようにですが, あなたは御存知ですか? ……このひとの叔父たちは, よほど二人を結婚させたがっている様子です。とんでもないことです! ……この女ときたらまるでコウモリで, 行きずりのものにはぜんぶその翼をひっかけるのです。ぼくもかつてかの女が好きだった時がありましたが, いまやかの女はぼくにほとんど強要するようにして愛の言葉を言わせる有様 ……でもよくわからないのですが, かの女のしぐさや声には, 何かしら粗野で, ごつごつしていて, やつれたようなところがあって, いや気がさします。気に入られる努力しながらでも, ふと屈辱を味わせてやって, かの女が自分

のワナにかかるのを見てよろこびたくなる, そんな女です>¹⁾

この手紙を出して間もなく, つまり翌年の1月5日, 友人アレクセイ・ロプーヒンがモスクワへ戻ったその日に, レールモントフはスジューヴァやその家族のものたちが怒り狂うような内容の匿名の手紙を, わざとかの女の叔母の手中に落ちるような工作をして送りつけている。なぜこんな手のこんだ方法を使ったのだろうか? かれ自身の説明によれば, 社交界の眼前で彼女と切れたことを見せつけるための絶好の方法だと思ったからだという。²⁾ それにしても4年以上も前に受けた侮辱の復讐を実行するという神経は, わたしたちに理解しがたいものを感じさせる。もう一人の相談相手であるヴェレジャーギナ (A. M. Верещагина) にのちほど <Итак, вы видите, я хорошо отомстил за слезы, которые проливал из-за кокетства m-ше S. 5 лет назад. Но мы еще не расквитались. Она терзала сердце ребенка, а я только помучил самолюбие старой кокетки, <……> そんなわけで, ぼくは5年前にマドモアゼルSの嬌態のために流した泣の復讐をうまくやってのけたわけです。でも, われわれの清算はまだ済んではいません。かの女は子供の心をずたずたにしたのに, ぼくは大年増のコケットの自惚を苦しめただけで, <……> ³⁾ と書いているレールモントフに一種の婁味を覚えるのはわたしたちだけであろうか?

『仮面舞踏会』の自伝的な基盤を研究したカマーロヴィチ (B. Камарович) は, レールモントフの公言している内容から読みとれる二つの理

1) IV, 395-396. 原文はフランス語。

2) Ср. IV, 401. レールモントフは誇らしげにヴェレジャーギナにその匿名の手紙の内容をかいつまんで紹介している。それはどの程度正確なものなのか, どの文言がどのような効果をひき出したのか判断がつきかねるが, 訳文を付しておこう。<マドモアゼル, わたしは, 当方ではあなたを存知あげても, あなたの方では当方を御存知ないところの人間でありまして……うんぬん, 一筆御警告申し上げます。若い男のエム・ユーにはくれぐれも御用心のほどを, やつはあなたをたらしこもうとしています, などなど。その証拠は(とっているんな出鱈目を並べて)しかじか, かくかく>

3) Там же стр. 402.

由、すなわち、受けた侮辱に対する復讐と、もうひとつ、「社交界」の注意をひきつけ、いかなる代価を払おうともそこで有名になりたいという打算、これらの他に第3の、わざと隠して言おうとしない理由があると主張する。アレクセイ・ロプーヒンの妹でレールモントフの恋人であったヴァルヴァーラが、愛してもいないずっと年上の男と結婚するということを知って衝撃を受けた詩人が、そのうっぶんをはらすために、アレクセイがスシコヴァにふられるように仕組んだ企てだったというのである。¹⁾ もしこれが事実ならば、レールモントフという男は、ますますもってイヤな男ではないか？

しかしこれはカマーロヴィナの勝手な推測にすぎない。かれ自身が自説の傍証としてあげている事実、すなわち、1835年になってマリヤ・ロプーヒナに宛てた2通目の手紙で <верен ли слух о предстоящем замужестве m-lle Barbe?> マドモアゼル・バルブが結婚予定だという噂は本当ですか？²⁾ と聞いているのは、逆に、レールモントフがまだ真実を知っていないということを証明するものではないだろうか？ かりにこの手紙が1月1日に出されたところで、匿名の手紙を出した1月5日までに、当時の郵便事情では返事を受けとることはできないはずである。わたしたちが先ほど引用したヴェレジャーギナ宛の手紙でもレールモントフは同様の質問を繰返している。ところがこの手紙は、アレクセイ・ロプーヒンがモスクワへ戻ってしばらくしてから書かれたものであることは、文面からして明白な事実なのである。³⁾ 先ほども指摘したように、匿名の手紙はロプーヒンがモスクワへ戻ったその日に出されたのだ。さらに反証をあげよう。レールモントフ年譜を作製したマヌイロフ (В. Мануйлов) は、詩人がシャン＝ギレイ (А. П. Шан-Гирей) とチェスをさしている最中に受けとった手紙で、ロプーヒナの結婚が近いことを知ったのは、1835年の春のことだとし

1) См. «Литературное наследство», т. 43-44, стр. 638.

2) Там же.

3) Ср. IV, 400.

ている。¹⁾ 結婚式は同年5月であったから、この時はじめてレールモントフは一縷の望みも消えて「表情を変えて真青に」なったと見るのが妥当であろう。カマーロヴィチ説に従えば、たんなる噂だけで、少年時代の友人であり、しかも信頼するマリヤ・ロプーヒナの弟であるアレクセイに手ひどい打撃を与えておきながら、そのあとなおもしつこく真相を聞き出そうとする低俗な詩人像が浮びあがるだけである。引用した二通の手紙を先入観なしに読めば、アレクセイに対してレールモントフは、何のわだかまりもわるびれた気持もいっていないことがわかるはずである。むしろ、くだらぬ女から離してやったのだという気持がにじみ出ているほどだ。

さてここでまた話を戻そう。いったいレールモントフがスシコーヴァに対して、これほどまでに凝った復讐をしたのはどういう動機からなのだろうか？ もしエカテリーナ・スシコーヴァ個人に対する復讐が直接の目的であったのなら、わざわざかの女の叔母の手元に、姪を侮辱する匿名の手紙が届くような手段を取る必要はかならずしもなかったはずである。そうすることによって必然的に生じるもうひとつの結果、つまり、つい最近社交界に入ったばかりの、どこの誰とも知れなかったレールモントフという男について、たちまち社交界全体が抱く不遜な印象、これこそが本来獲得すべき目的だったのではないだろうか。レールモントフは社交界そのものに自分を対置させ、大胆に抵抗詩人としての不敵さを見せつけるために、「傲慢な魂」が「無敵の敵への復讐にいきまき、悪事をたくさん働く用意」²⁾ をする、とうたった自分の詩を地でいくように行動したのである

1) См. В. Мануйлов, Летопись жизни и творчества М. Ю. Лермонтова, изд-во «НАУКА», М.-Л., 1964, стр. 62. この点については、А. Р. Шан-Гилейの回想に基づいて確認されている。

2) I. 357. 『1831年6月11日』という題名の32節からなるこの詩は、初期レールモントフの詩の中でも、もっとも優れた哲学詩だとされている。ナターリヤ・イワノヴァ (Н. Ф. Иванова) との恋愛の破局の直後に書かれていながら、感情におぼれることなく、よくこの時期の(それまでの生涯の、といった方が正確か) 詩人の内面世界を、哲学的な高みにまで昇華させており、そのために、この詩において唱えられている基本的な詩人の確信はその後さまざまな作

う。士官学校を卒業して始めて踏み出したこのような第一歩が、社交界を舞台にして悪魔の新たな形象を展開させようという動機になっているのは疑いのないことである。

§ 6 レールモントフの名が社交界ばかりか、ロシアの知的な階層全体に知れ渡るためには、その時からわずか2年しか必要としなかった。

1837年1月27日、夕闇の中をソリに乗せられて、ダンテスとの決闘で瀕死の重傷を負ったプーシキン (А. С. Пушкин) がモイカ (Мойка) の自宅 (借りて住んでいたヴォルコンスカヤ公爵夫人邸) に戻ったというニュースは、その日のうちにペテルブルグじゅうに知れ渡った。この時レールモントフは病床にあったので、知人から色いろ尾ヒレがついてゆがめられた情報を教えてもらったけど、自分では語っているが、¹⁾ 実際には、まだプーシキンが死線をさまよっていた28日、流された死亡の噂につられて深い悲しみとともに集って来た人々の群の中にレールモントフの姿を目撃した人がいたとの説もある。いずれにしてもかれは、プーシキンとは一度の面識もなかったが、この偉大な詩人の運命に並なみならぬ関心を持っていたことはたしかである。この事件にまつわる様ざまな事がらに強い関心を寄せたということでは、レールモントフの友人たちも同様であった。28日の夜は友人スヴァトスラフ・ラエフスキィ (Святослав Раевский) と同居していたレールモントフをかれらが訪ずれて、激論をたたかわせた。²⁾

ペテルブルグじゅうの学生たちや知識人、役人や一般市民の間でも、あるいは逆に保守的、反動的な人びともそうであったろうが、この話でもちきりであったということだ。だが、プーシキンの決闘死に強い関心を持った人びとがどれほど大勢いたにしても、かれを死に迫いやった、きたない

品の中で主要なモチーフとして繰り返されている。同じく初期戯曲の中で注目すべき『変り者』でも、この詩の第1, 2, 5節が引用されていることからして、おそらく詩人自身も特別に重い意味をこの詩に与えていたのであらうと想像される。

1) См. В. Мануйлов, Летонись жизни и творчества М. Ю. Лермонтова, изд-во «НАУКА», М.-Л., 1964, стр. 69.

2) См. I. 561.

行為に直接・間接にたずさわった者たちを、真向から糾弾した詩『詩人の死』(《Смерть Поэта》)を書いて堂どうとそれを流布した人間は、レールモントフを除いてほかにはただ一人もいなかった。友人ラエスキィといっしょに手書きのコピーを作って密かに流したところ、それは何万部にも書き増しされて、2日間で全市にひろがり、読まれ、暗唱されたということである。

『仮面舞踏会』が書かれてから1年以上も後の作品である『詩人の死』を、前者の執筆の動機の一要因として取り上げて論ずることは、一見したところ、物理的法則に逆らった、もっとも単純な誤ちを犯しているように映るかもしれない。たしかに時間系の中で形式的に考えれば、後に書かれたものが先行するものに影響を与えたり、創作上の動機となることはありえない。しかし、後に書かれたものに含まれている内容が、ずっと以前からの思索の結果の凝縮したものだとしたらどうであろうか。友人のラエフスキィや詩人の遠縁にあたるシャン＝ギレイの証言を信ずるならば、プーシキンの死の直後に広まったこの挽歌(すなわち現在知られている詩の最後の16行を除いたもの)は、けっしてレールモントフひとりではなく、きわめて大勢の人びとの意見を反映したものであり、実際の執筆に要した時間はわずか数分間であったということである。¹⁾ とすれば、この挽歌に込められているような内容は常日頃、かれらの仲間うちでは深い感情的・思想的な思い入れとともに語られ、論じられていたことであり、レールモントフはそれらを以前からたんなる情報として聞いていたのではなく、ほとぼり出るように形象化されたことでもわかる通り、かれの内部で十分に成熟した思念となっていたのである。

2月7日に追加して書かれた16行を別にすれば、『詩人の詩』は、プーシキンの決闘死に直接まつわるものと、近年のプーシキンの不遇にかかわるものとに、内容を二分することが可能である。ここでは、この論文のテーマに関係のある部分に的を絞って、とくに後者を注意深く見てみることにしよう。引用した詩行のあたまにある数字は、便宜上論文筆者が原文の

1) См. I. 561.

詩行番号を付したものである。

5. Не вынесла душа Поэта
6. Позора мелочных обид,
7. Восстал он против мнений света
8. Один, как прежде …… и убит!

<………>

13. Не вы ль сперва так злобно гнали
14. Его свободный смелый дар
15. И для потехи раздували
16. Чуть затаившийся пожар?

<………>

39. Зачем от мирных нег и дружбы простодушной
40. Вступил он в этот свет завистливый и душный
41. Для сердца вольного и пламенных страстей?
42. Зачем он руку дал клеветникам ничтожным,
43. Зачем поверил он словам и ласкам ложным,
44. Он, с юных лет постигнувший людей?……

<………>

45. И прежний сняв венок — они венец терновый,
46. Увитый лаврами, недели на него;
47. Но иглы тайные сурово
48. Язвили славное чело;

6. くだらぬ数かずの侮辱の恥に
5. 詩人の魂は堪えきれず,
7. 世論を敵に立ち上がった,
8. 今度も一人で……そして殺された!

<………>

14. かれの自由で勇氣ある才能を
13. 手ひどくいじめにかかったのも,
14. やっと消えかかっていた火事を,
15. 慰みに煽ったのもお前たちではないか?

<………>

39. なぜ閑かな安逸と純朴な友情を捨て,

41. 自由な心と炎の熱情にとってはただ、
 40. 妬まれ息詰る社交界へ入ったのか？
 42. なぜつまらぬ誹謗家に手を差し延べ、
 43. 虚偽の言葉とお愛想を信じたのか、
 44. 若い頃から人間に通じていたかれが？……

<…………>

45. 往時の花冠を取って、かれらは荊冠に
 46. 月桂樹をからませ、かれにかぶせた。
 47. だが隠れた棘は荒あらしく
 48. 栄えある額を傷つけた。¹⁾

「今度も一人で立ち上がった」というからには、かつてプーシキンがやむにやまれず試みてみたものの、みじめな挫折をあじわうことになったあの皇帝ニコライ I 世への抵抗、1834年6月25日の年少侍従職辞表願提出問題を、レールモントフはもちろん聞き知っていたと見るべきだろう。「やっと消えかかっていた火事を、慰みに煽った」というのは、絶世の美女であり、またコケットであったといわれるプーシキンの妻ナターリヤについて、社交界のプレーボーイたちとの間に取沙汰されていた艶聞が、最近になってまたフランス人ダンテスとのスキャンダラスな噂となって再燃してきたことを指しているに違いない。さて問題は、39から48までの詩行の裏に意味されている事実である。

モスクワから妻とともに首都へ移り住んだ1831年の末、プーシキンは年俸わずか5000ルーブルという外務院所属の9等官になり、1833年の末には宮廷の年少侍従(камер-юнкер)に任命されている。年少侍従とは20歳にもならぬような貴族の子弟が就いた無給の職で、しかもその職務内容はいわゆる「お小姓」のそれであったから、いかに9等官という低い身分とはいえ、34才の、すでに名声を博している詩人にとっては不名誉きわまりないことであった。プーシキンの伝記を書いた池田健太郎は、この人事の裏に、もうひとつの、詩人にとっては堪えがたい理由があったことを指摘している。「<…………>この任命にはもうひとつ詩人の神経にさわる面があっ

1) I. 21-22.

た。それが明らかに詩人自身のためではなく、詩人の妻ナターリヤを公におおやけ宮中につき留めるための方便にすぎなかったからである。『おととい、わたしは年少侍従に任命された（わたしの年齢にはかなり不適當なことだが）』と、1834年1月1日、詩人はふた月ほど前からつけはじめた最後の日記のなかに書いている。『もっともナターリヤがアニチコフ宮殿で踊ることを宮中が欲したのだ。かくしてわたしはロシアのダンジョーとなる』
 <……>シチョーゴレフは『プーシキンの日記におけるニコライⅠ世』と題する論文（1923）のなかでこの点に触れて、わずか25ページの、抑制された、言葉少ない『日記』の記述のなかで、詩人が10回もこの不満に筆を戻している事実に着目しているが、それほど詩人には堪えがたい侮辱だったのだろう。しかも詩人はそれを忍ばなければならなかったのだ。妻のために、また権力との関係を荒立てないために¹⁾ ——榮譽ある「月桂樹」の冠をかぶせられたかのように見えながら、詩人の「栄えある額を傷つける」「荊の冠」であったというのは、当時の社交界でも大変な話題となり、陰ではあざけ笑う人びとも多かったであろう、この年少侍従任命の事実を指しているのだと思われる。

さてこのへんで再び話をもとへ戻そう。たとえ作品分析の結果、『仮面舞踏会』の中にプーシキンの晩年の運命から取った様ざまなモチーフの隠されている蓋然性が立証されたとしても、この作品と『詩人の死』がその創作上の動機の点で密接な関係があるかどうかは、少なくとも、挽歌にこめられている上記のような内容を、レールモントフが、遅くとも1835年の半ばごろまでにそれを知り得たかどうかにかかっている。なぜなら、『仮面舞踏会』の執筆開始はその頃だろうと思われるからである。

レールモントフが自分の目で社交界の裏舞台をのぞいたのは、すでに§5で書いたとおり1834年も極く末のことであった。この頃プーシキンは、ほとんど創作意欲のわかなかつた2カ月間にわたるボルジノでの「不毛の秋」を早そうに切り上げて、社交界の最盛期をむかえていた首都に帰って

1) 池田健太郎，プーシキン伝，中央公論社，昭和49年，p. p. 375-376.

いた。しかしながら両人が直接話をする機会はなかったらしい。もしプーシキンの宮廷における一連の事情を、かなり深いところまで伝え得た人物がいたとすれば、そのひとりはおそらく、祖母の甥にあたり、レールモントフとは同じ年の年少侍従ニコライ・アルカージェヴィチ・ストルイピン(Николай Аркадьевич Столыпин)であっただろう。『詩人の死』の最後の16行は、ダンテスやその養父ヘッケルンが外交官であるためにロシアの法律や法廷では処罰されないという意見をのべた、この男との論争の末に追加して書かれたものである。¹⁾ 1834年6月の、いわゆる「辞表事件」当時ニコライ・ストルイピンは20歳であったろうから、年少侍従に就任していた可能性は十分にある。もししていなかったにしても、この事件について「お小姓」たちの間で、まだあれこれ取沙汰されていたであろう1835年の中頃までには宮中に入っていたであろうと考えられる。1834年の12月から社交界へ出入りし始めていたレールモントフとこの男が1835年の前半のいつか出会い、あれこれ宮中のことや、それから当然ながら、プーシキンのことも話したであろうということは、たんなる予想としてかたづけられてよいことではない。1837年の2月に、わざわざレールモントフの下宿を訪問し、きわめて政治的な内容の議論をする男が、1年やそこらの顔見知りとは、とうてい思えないからである。

もうひとつのニュース・ソースとして考えられるのは、トゥルベツコイ兄弟のところである。レールモントフの年譜によれば、<Зима 1834/35г. Лермонтов часто бывает у братьев Александра и Сергея Турбецких, встречается здесь с А.И. Барятинским, Б.А. Перовским (братом писателя), Сергеем Голицыным, Бахметевым, Н.А. Жерве и др. <……> У Турбецких Лермонтов мог встречать Дантеса. 1834年~35年の冬。レールモントフはアレクサンドルおよびセルゲイのトゥルベツコイ兄弟のところへひんばんに出入し、そこでバリャチンスキイ、ペロフスキイ(作家の兄弟)、セルゲイ・ゴリョーツィン、パフメーチェフ、ジェルベなどとお会う。

1) Ср. I. 561, а также, В. Мануйлов, Летопись жизни и творчества М. Ю. Лермонтова, М.-Л., 1964, стр. 71.

<……>トゥルベツコイ兄弟のところでは、ダンテスにも会ったであろう¹⁾

ここにはわたしたちにとって注目すべき人物の名が少なくとも二名出ている。ひとりはいうまでもなくダンテスだが、もうひとはバリャチンスキイである。精神的疾患と闘う力を持っている人間なら肉体的苦痛に打勝つことはできないものだと、いつものように主張するレールモントフの前で、この男はだまって、燃えさかるランプのホヤを手づかみにし、平然と運んだというエピソード²⁾によって知られているばかりでなく、かれもやはり『詩人の死』と関係があるのである。

ニコライ・ストルィピンとの論争のあと、憤りを押えきれずに書いた16行は、<А вы, надменные потомки / Известной подлостью прославленных отцов. お前たち、名だたる卑劣さによって悪名をはせた父祖をもつ、厚顔無恥の子孫らよ>³⁾で始まるが、この詩の流布の過程で、これに該当する貴族家の名を、その写しに書き込んだものがいた。そこには、オルロフ伯爵家(графы Орловы)、ボブリンスキイ伯爵家(графы Бобринские)、ヴォロンツォフ伯爵家(графы Воронцовы)、ザヴァドフスキイ伯爵家(графы Завадовские)、バリャチンスキイ公爵家(князи Барятинские)、ヴァシーリチコフ公爵家(князи Васильчиковы)、エンゲリガルト男爵家(бароны Энгельгардты)、フレデリク男爵家(бароны Фредерики)の名が連ねられているという。⁴⁾ これらの貴族家の祖先も後裔も、皇帝にあからさまに取入ったり、閥閥や情事関係を利用したり、奸策を弄したりして高い地位を追求したものたちだったとされている。トゥルベツコイ家に出入りしていたアレクサンドル・イヴァーノヴィチ・バリャチンスキイがはたして、そのような父祖の資質を受け継いだ人物であったかどうかは定かではないが、かれとの出会いは、誇り高いレールモントフの貴族としての意識の中に、不快の種をうえつけたことであろう。その当時玉座に近

1) В. Мануйль, Летопись жизни и творчества М. Ю. Лермонтова, М.-Л., 1964, стр. 61.

2) См. там же.

3) I, 23.

4) См. I, 561-562.

くたむろしていたこのものたちのおごりに満ちた日常生活は、たとえバリーチャンスキイ公爵当人が語らなかったにせよ、この集いの仲間たちの間では話題になっていたと考えると不当ではなからう。だからこそ、『仮面舞踏会』の舞台として、この名簿にのっているエンゲリガルト男爵家が実名で示されているのではないのか。同時代人の常識からすれば、プーシキンの妻ナターリヤが1834年1月17日はじめて正式に宮中舞踏会でデビューした、ポプリンスキイ伯爵家も、決して忘れることのできぬ存在であった。皇帝のニコライ I 世は、念願かなって露骨にかの女に好意を示し、プーシキンがそれを見て不満をかくさなかったことは、¹⁾ もちろん噂にのぼっていたはずだ。ニコライ I 世とプーシキンの、この呪わしい関係は、社交界を舞台にその後もずっと続くのだから、トゥルベツコイ兄弟のところでも当然話題になったことであろう。

いわゆる「地下出版」の『詩人の死』が流布する過程で、だれもがレー尔蒙トフの詩行の間に、これらの実在の貴族たちを思い描いたとすれば、多分に検閲を考慮しながら公然たる発表を期して巧みに書かれた作品は、もっともわかりにくく、しかしそれだけに、一読して知り得る内容よりもはるかに深い意味——当時の賢明な読者にはそれがきつと読み取れたはずだ——が隠されているにちがいない。文学作品をとりまくこのような政治的・社会的コンテクストは全般的に存在していたから、作家はこのコンテクストとの緊張関係を利用しながら作品を生み出したし、またそうせざるをえなかった。まして『仮面舞踏会』のように、題名からしてなにかカムフラージュ性 (замаскированность) を暗示している作品は、芸術作品として鑑賞される前に、まず“解説”されなければならない。そのためには、この作品の発表を勝とるために、かれがいかに検閲と闘ったかを調べておくことが必要になる。

<続>

1) 池田健太郎, 前掲書 p. 377参照。